弘法大師和讃（こうぼうだいしわさん）

頭帰命頂礼遍照尊　唱宝亀五年の六月に
玉藻よるちょう讃岐潟　屏風が浦に誕生し
御歳七つの其時に　衆生の為に身を捨て
五の岳に立雲の　立る誓ぞ頼もしき
遂に乃ち延暦の　末の年なる五月より
藤原姓の賀能等と　遣唐船にのりを得て
しるしを残す一本の　松の光を世に広く
弘め給える宗旨をば　真言宗とぞ名づけたる

真言宗旨の安心は　人みなすべて隔てなく

凡聖不二と定まれど　煩悩も深き身のゆえに

ひたすら大師の宝号を　行住坐臥に唱うれば

加持の功力も顕らかに　仏の徳を現ずべし

不転肉身成仏の　身は有明の苔の下

誓は竜華の開くまで　忍土を照す遍照尊

仰げばいよいよ高野山　流れも清き玉川や

むすぶ縁しの蔦かずら　縋りて登る嬉しさよ

昔し国中大旱魃　野山の草木皆枯ぬ

其時大師勅を受け
神泉苑に雨請し
甘露の雨を降しては
五穀の種を結ばしめ
国の患を除きたる
功は今にかくれなし
吾日本の人民に
文化の花を咲せんと
金口の真説四句の偈を
国字に作る短歌
いろはにほへどちりぬるを
わがよたれぞつねならむ
うゐのおくやまけふこえて
あさきゆめみじゑひもせず
まなび初めにし稚子も
習うに易き筆の跡
されども総持の文字なれば
知れば知るほど意味深し

僅に四十七字にて　百事を通ずる便利をも

思えば万国天の下　御恩を受けざる人もなし

猶も誓の其中に　五穀豊熟富み貴き

家運長久智慧愛敬　息災延命且易産

あゆむに遠き山河も　同行二人の御誓願

八十八の遺跡に　よせて利益を成し給う

罪障深きわれわれは　繋がぬ沖の捨小船

生死の苦海果てもなく　誰を便の綱手縄

ここに三地の菩薩あり　弘誓の船に櫓櫂取り

たすけ給える御慈悲の

不思議は世世に新なり

南無大師遍照尊

南無大師遍照尊

南無大師遍照尊